

2022年度9月 研修報告

日 時:2022年9月18日(日)10:00~12:00

場 所:ひまわりセンター 4階 第4会議室

研修内容:事例検討「本人にニーズが見えにくい中でSSWerとしてできることは」

事例提供者:土居 やよい氏

助言者:鈴木 庸裕 氏(日本福祉大学 教授、日本学校ソーシャルワーク学会代表理事)

参加者:12名(助言者、事例提供者含む)

内容

SSWerは教育と福祉と異なる分野の中で、ジレンマを感じながら子どもを中心に支援していくことが求められます。ですが、教育と福祉の他分野の中にある矛盾をどう重ね合わせるかを考えることもSSWerの仕事だと考えました。子どもとのかかわりの中で、うまくいかないな~これからの支援をどうしようかな?と感じることもありますが、その気持ちSSWerの活動の中で大事なことだと語られました。

ケースには過渡期や転換期があり、ケースの状況に応じてSSWerの立ち位置、役割も変わってくることを頭におくことが必要で、自分自身を俯瞰してみることができることが事例検討の意義という意見も交わされました。

鈴木先生から、「ニーズは複数あり、どのニーズが見えにくいのかを1つずつ見極めることが必要」、「ニーズに対する想いは複数あり、どの想いも事実です。ニーズがわかりにくいというのは、SSWerが分からないだけで、子どもがニーズを隠しているかもしれないこともあります。でもニーズを隠した理由は?と考えていくことを見極める」ことも語られ、SSWerとして必要なことだと思いました。

参加者の感想には、「自分が学びの保障はしたいという気持ちが強いことに気づいた。でも、SSWerとして子どもの想いを優先したい。」「動きのないケースもある中、小さな変化に気づいていきたい。ケースが動いたときにはSSWer自身の役割も考えていきたい。」「SSWerは生活を支援するという役割があるからこそ、介入しすぎてしまっているのかなと思うことも多い。ケースの過渡期の見極めもSSWerの見極めになってくると思いました。」とありました。

土居さんからは、「SSWerは(子どもだけでなく保護者や先生たちの)いろんな立場の意見を聞くからこそ、子ども中心ということが薄れてしまうことがある。だからこそ、常に子どもを中心にした支援を考える意識を忘れない。」と言われていました。また、鈴木先生からは、学校の一員として、学校の先生と一緒に取り組んでいく姿勢・「学校福祉」を大切にされているお話も伺いました。

愛媛県の方も含め12名もの参加者と、感染症予防対策を実施しながら事例検討会を行うことができました。参加者のみなさま、ご協力ありがとうございました。久しぶりの対面での事例検討だったこともあり、参加者のみなさんの意見や熱量を肌で感じる事ができ、オンラインでは味わえない雰囲気でした。(善通寺市SSWer 清水 美沙)